

京都大学工学部地球工学科 学生員 ○梶原 大督
 京都大学大学院工学研究科 正会員 菊池 輝
 京都大学大学院工学研究科 正会員 藤井 聡

1. はじめに

「土木」とは、我々の社会に存在する様々な土木施設を「整備」し、そしてそれを「運用」していくことを通じて、我々の社会をより良い社会へと少しずつ改善していこうとする社会的な営み全体を意味するものである¹⁾。しかしながら施設整備や技術的運用が十分に施されていても、人々による土木施設の適切な利用が不十分なために、これらの施設の社会的機能が最大限に発揮されずにいる状況が様々な場面で見受けられる。より良い社会を構築することを目的とする「土木」とっては、こうした人々による適切な利用がなされていない状況の解決は避けては通れない問題であり、この状況を解決するためには、人々に適切な利用を促していく社会的運用のマネジメントが必要である。では、いったい何故土木施設の適切な利用がなされていない状況が起こるのだろうか。その回答として社会的ジレンマの存在が考えられる。ここで社会的ジレンマとは、

「長期的には公共的な利益を低下させてしまうものの短期的な私的利益の増進に寄与する行為（非協力行動）か、短期的な私利益は低下してしまうものの長期的には公共的な利益の増進に寄与する行為（協力行動）のいずれかを選択しなければならない社会状況」¹⁾

である。社会的ジレンマ状況では、人々は短期的かつ私的な利益を優先して行動しようとする傾向があり、その結果、社会的な利益が著しく低下すると考えられる。よって、この社会的ジレンマを解消するためのマネジメントが必要であり、それにあたり、まずはどういった人々が非協力的に振る舞うのかを知る必要がある。この点について「人は皆、純粋なる利己主義者である」という信念を持つことで、人々が実際に利己的になってしまうということが議論さ

Daisuke KAJIHARA, Akira KIKUCHI and Satoshi FUJII

kajihara@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

れている²⁾。そこで本研究では、この信念を利己主義人間観と定義し、以下の仮説の検証を行った。

仮説：利己主義人間観が非協力的な様々な心的傾向や行動をもたらす

2. 理論仮説

本研究では「土木」に限らず幅広い分野の検証を行うこととした。以下利己主義人間観を信じることでどういった心理作用を経て、どのような帰結をもたらすのかについての理論仮説を簡潔に述べる。

1) 金銭や労働態度 (図1)

世間の人間が皆利己的であると信ずる利己主義人間観を持っている場合、どんな人でもお金さえ積みばどんなモノでも譲ってくれると信ずることであろう。それ故、お金さえあれば欲しい物を何でも手に入れられると考える傾向が強化され、その結果、お金が何よりも大切なものであるという拝金主義を支持するようになる、と考えられる。一方、お金儲けが唯一重要だと信じている場合、「労働」という行為はお金儲けの手段という意味以外の意味を持ち得ないと信ずることとなり、結果として、短期雇用が合理的であるとして支持したり、成果主義を支持したり、年功序列制を否定したりすると考えられる。

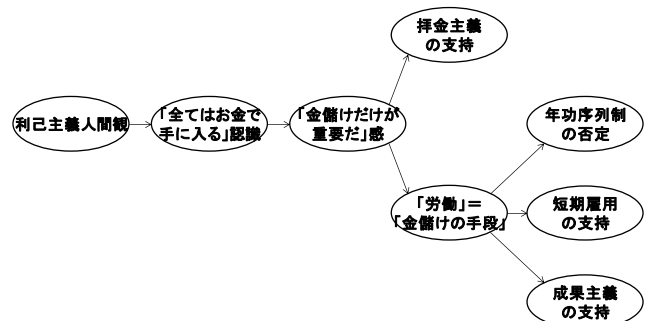


図1 金銭や労働態度に関する帰結のモデル

2) 政治や世論形成 (図2)

利己主義人間観を信じていると、人間が利己的であるとする合理的選択理論に疑いを持たず、この理論に基づいて構築される新古典派経済理論を信じ、

この経済理論に従って自由な市場を実現しようと構造改革を支持し、さらに政府が市場に介入できないようにするべきだと判断する、と考えられる。あるいは、官僚などの公務員の行う行政活動は利己的な動機に基づいて行われていると考え、官僚不信に陥り、ひいては政府不信に陥る、と考えられる。

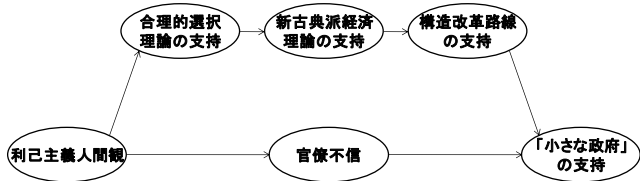


図2 政治や世論形成に関する帰結のモデル

3) 人間関係や人間性 (図3)

利己主義人間観を信じていると、他人の好意には何らかの下心が含まれており、その下心に応えられなければ怒りを買ってしまうと考え、そう考えることで好意を受容できなくなり、他者を避けるようになり、その結果大衆性³⁾が高まる、と考えられる。また、自分の何気なく行った親切にも、自分の得になるようなことがあったからこそ、行ったのだろうと考えるようになり、そうした思考を繰り返すことで親切行為の回数自体が減少する、と考えられる。

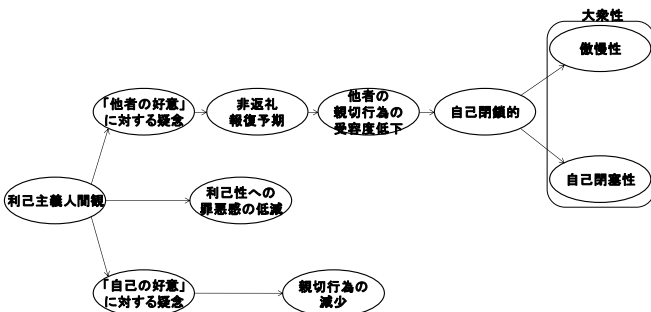


図3 人間関係や人間性に関する帰結のモデル

3. 方法

調査対象は、大学(院)生(男性140人、女性20人、年齢平均23.15歳、年齢標準偏差1.26歳)で、質問紙による調査を行った。質問項目は、2. で述べた帰結、要因のそれぞれに関する諸項目(一部を除き、独自に作成)から構成される。分析にあたって、まずそれぞれの変数に対して信頼性分析を行い、一定の信頼性が得られなかった変数に関しては、各質問項目に分解した上で分析に用いることとした。

4. 結果と考察

「帰結」に関して2. で検討した因果仮説(図1

～図3)に基づいて回帰分析を行った。その結果、利己主義人間観を信じる傾向が強いほど、以下のような傾向が見られることが統計的に示された。

(1)世の中はお金が全てであると考え拝金主義を支持するようになる。また、労働をお金儲けの手段でしかないと見なすことで、年功序列の給与体系を否定し、反対に成果のみを絶対とする給与体系を是とするようになる。こうした拝金主義に基づいた、お金儲けだけを考え周りを顧みない行動は、その行動自体が非協力的な振る舞いである。また、成果のみを重視する態度は、成果を出さなければならないという観念に駆られることになり、その結果、人のために働いたり、協力し合うなどの姿勢が低下してしまうことも一つの可能性として考えられる。

(2)人間が常に利益を追求するという理論を認め、そのために消費者が自由に選択できる市場が必要だとし、そうした市場の実現のために構造改革や規制緩和、民営化といった諸施策を支持するようになる。そして官僚の活動が利己的なものであると考え官僚不信に陥り、ひいては政治不信に発展し、いっそう諸施策を支持するようになる。規制は本来人々の利己的な行動の抑制のために存在するが、これが撤廃されることになれば、ますます利己主義者ののさばる社会を生み出してしまう可能性も考えられるだろう。

(3)他人の好意を信じられず、好意から避けるように他者との接触を断つことで、自己以外への無関心を引き起こし、それによって他者との比較により自分を見つめ直すことが少なくなり、結果彼に過剰な有能感を抱かせてしまうようになる。さらには、自分にも利己的な動機が備わっていると信じるようになり、利己的に振る舞う傾向が強くなっていく。

以上から、本研究で推定した「利己主義人間観が非協力的な様々な心的傾向や行動をもたらす」という基本的な因果仮説が実証的に支持された。

参考文献

- 1) 藤井 聡：土木計画学—公共選択の社会科学—，学芸出版社，2008
- 2) 藤井 聡：なぜ正直者は得をするのか—「損」と「得」のジレンマ—，幻冬舎，2009
- 3) 羽鳥 剛史ら：大衆性尺度の構成—“大衆の反逆に基づく大衆の心的構造分析—，心理学研究，79(5)，2008